

みのじゅんれいさんじゅうさんしよふだしよ

## 美濃順礼三十三所札所

三十三所巡りは現世利益が叶うとされる観音信仰の一つで、江戸時代に流行しました。長福寺は美濃国の三十一番の札所であったと伝わっています。長福寺には住職光円が作成した美濃順礼三十三所札所の版木と、その版本の一部が残されています。版本には長福寺の説明と、御詠歌が記されています。

我頼め慈悲を長瀬の観音音 世に挟まれてあらんかざりは

宝永3年（1706）に美濃順礼三十三所札所の三十一番をめぐって、長福寺と永保寺との間で揉め事が起きました。長福寺は正慶元年（1332）より美濃国三十一番札所であると寺伝にも記録されていましたが、永保寺の観音堂前にも「当国三十一番虎溪山永保寺」と書かれた額が掲げられていました。そのため永保寺の額の取り下げを長福寺が願い出、結局永保寺の額の「当国」の二字を除くことで内済となりました。



美濃順礼三十三所札所版本（長福寺所蔵）

## がくさん 学山としての長福寺

長福寺には多くの経典・教本が残されています。中世から江戸時代に集められたこれらの経典・教本類は、長福寺の僧侶らが<sup>大須宝生院</sup>をはじめあちこちの寺院で師事し、<sup>伝法灌頂</sup>を受けて書写したものです。そのように集められた経典・教本類は、さらに長福寺に出入りする修行僧が学ぶ教材ともなりました。「長福寺道場」「修業道場」という名が記されたものもあり、この寺が学山（学問寺）であったことを物語っています。

現在も長福寺で行われている護摩祈祷は、護摩壇の中央に置かれた火炉で護摩木を焚き、火中に穀物などの供物を投じて諸尊を供養する修法です。僧侶の自らの修行のためと他者への祈りのために行われる修法とされます。



長福寺の護摩祈祷の様子



密教法具（上：三鉗杵 左：五鉗杵 中：五鉗鈴 右：独鉗杵）（長福寺所蔵）

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット「長福寺展」

展示期間・場所：令和5年7月24日（月）～12月22日（金）

多治見市文化財保護センター展示室

発行：多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26

TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033

URL <https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>

発行部数：1000部（印刷費用 69,000円）（税抜き）

【主な参考文献】

多治見市 1980『多治見市史』通史編上

多治見市教育委員会 2023『多治見市文化財保護センター研究紀要第16号』

【謝辞】（敬称略）

青龍山長福寺 岡墨光堂 虎溪山永保寺 本土神社 福島金治 小木曾郁夫

多治見市図書館郷土資料室

# 長福寺展

「美濃国池田御厨某寺奉加帳」修理完成記念

青龍山長福寺は弁天町にある真言宗智山派の寺院です。その歴史は古く、鎌倉時代末期の創建とされています。市内では、石堂山永泉寺（池田町）、虎溪山永保寺（虎溪山町）に次ぐ古さで、江戸時代以前より本土神社の別当寺としてその管理にあたったことが棟札などからわかります。また、室町時代に造られた大日如来坐像（市有形文化財）を有し、多治見を代表する中世寺院として知られています。

近年まで念仏講や観音講、弘法大師信仰などが盛んで、江戸時代には寺子屋として親しまれていたとされることから、地域の信仰の中心のみならず文化的な中心地であったと考えられます。

令和2年2月、長福寺の史料を調査する中で<sup>しやうあん</sup> 正安3年（1301）ごろに書かれた奉加帳が発見されました。「美濃国池田御厨某寺奉加帳」と名付けられたこの史料は、市内で確認されている史料の中では最も古いもので、令和4年1月に多治見市有形文化財に指定されました。

今展覧会では令和4年度～5年度にかけて行った奉加帳修理の完成記念として、奉加帳を含めた長福寺の宝物を展示し、東濃地域の中世史に迫ります。

涅槃図（長福寺所蔵）

# 長福寺の縁起

18世紀初頭に当時の住職であった光円が寺伝をまとめ、現代まで伝わっています。これによれば、元弘元年(1331)、道忍・道一・道性の3人の沙弥(在家僧)の夢枕に観音様が現れ、南の川のほとりにある我を安置せよと告げられました。彼らが川の辺りを探してみると、柳の下に挟まれた観音像(廻間観音)を見つけました。領主・源頼氏(長瀬氏)も同じ夢を見ており、観音像を頼氏に献上すると灯明料として寺領50石が与えられ、土岐川のほとりに七堂伽藍の寺の建立を許されました。開基は栄光上人で、累代領主の祈願所となったと伝わっています。また、観音像を見つけた3人の沙弥は、元徳2年(1330)の本土神社棟札に勸進者としてその名が見られます。

天正4年(1576)に土岐川の大水で堂塔が流失し観音像のみが助かりましたが、領主長瀬氏はずでに断絶しており寺院の修復ができませんでした。その後、元禄2年(1689)に土岐川の大水で再び寺が流される被害があり、住職光円が寺の復興にあたったとされます。その際現在の本土神社の場所に寺を移して、観音堂を再興しました。また、正保3年(1646)には大須宝生院26世信海を住職として迎えて寺が再興され、以後長福寺は宝生院の末寺として現在にいたります。

# 領主・源頼氏

源頼氏(長瀬殿、長瀬氏)は長瀬郷の領主で、土岐源氏の庶流といわれています。道忍上人に帰依し、出家名を「道任」といいました。頼氏邸は現在の虎溪町から宮前町にあり、本土神社は頼氏邸の鬼門(北東)に位置するとされます。邸宅があったとされる地域には「大屋敷」という字名も残っています。

虎溪山永保寺の中世文書には頼氏に関する記述が多く見られます。正中3年(1326)の「源貞茂山河寄進状」には「長瀬殿山境」とあり、永保寺と頼氏の所有する土地が隣り合わせであったことがわかります。また、頼氏が永保寺と山林を売買した記録や息子道白所有の美濃国大野郡石太郷(現揖斐郡大野町)の土地を永保寺に寄進した記録などもあり、長瀬氏は長福寺だけでなく、永保寺ともかかわりが深い領主であったといえます。また、暦応2年(1339)に永保寺が勸願所となった際に頼氏と永保寺開祖・夢窓疎石が交わした書簡が残されており、二人の交流を知ることができます。

長福寺文書「美濃国池田御厨某寺奉加帳」では「頼氏」と別の場所に「長瀬殿」の名が見られることから、頼氏と別の長瀬の領主(先代か)がいたと考えられます。



「道任道任書状」(永保寺所蔵)



元徳2年本土神社棟札(本土神社所蔵)

長瀬郷領主「頼氏」2文寄進している

明智兵衛太郎殿

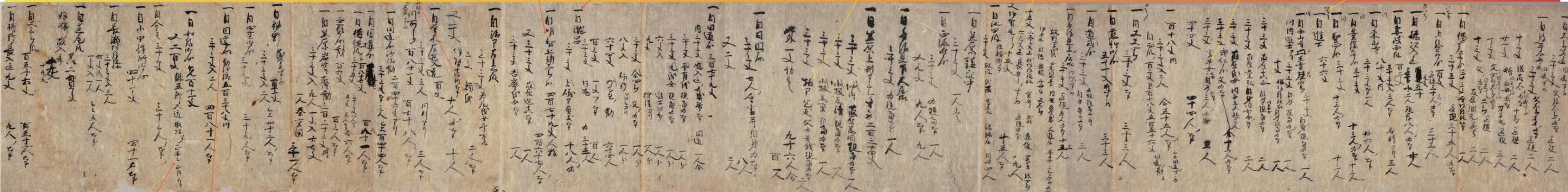
「一、」と箇条書きで書かれている

集めた確認の「合点」

池田殿 源頼衛

字牛女 33文寄進

ツマキ 「キ」の崩しが古い形



正安三 正月三日(1301)

「円道房より沙汰勧め」円道房が人々に勧めて銭を集めた

長福寺文書「美濃国池田御厨某寺奉加帳」(長福寺所蔵)

## 長福寺文書「美濃国池田御厨某寺奉加帳」 鎌倉時代 縦約 25.5 cm 横約 6.5m

この奉加帳は、寺院建立または仏像造営に関わる寄付金を募った名簿です。正安3年(1301)頃に作製された文書であると考えられ、市内で確認されている古文書の中では最も古いものです。

寄付者は美濃地域、名古屋～春日井の地域と広範囲に広がっており、総人数は1万人を超えます。頼氏のほか土岐源氏などの武士や僧尼、庶民も含まれ、女性の名も多く見ることができます。また、可児郡明智荘の有力者と考えられる明智兵衛太郎の名も見ることができ、土岐明智氏との関係も推察されます。

さらに正中元年(1324)に後醍醐天皇の企てた討幕計画(正中の変)で挙兵に加わった「土岐十郎」がこの奉加帳にある頼衛と考えられることから、中央の歴史を解明する上でも重要な史料です。



大日如来坐像(長福寺所蔵)

胸の前で智拳印を結ぶ

けつかふさ 右足を上に結跏趺坐

温和で理知的な顔立ち

髪を高く束ねて宝冠をいさぐ

## 大日如来坐像 室町時代 木造 玉眼 像高 38.5 cm

真言宗の根本仏は、宇宙の本体で絶対真理である大日如来とされます。「大日如来」という名は、太陽の光のように全ての衆生に慈悲の光を与え、全ての仏の中心という意味であるといわれます。

大日如来は、釈迦如来や阿彌陀如来のような出家の姿ではなく、宝冠をかぶり、うず高く髪を結うなど一般に「菩薩形」と呼ばれる姿であるのが特徴です。

また、大日如来には金剛界大日如来と胎藏界大日如来がありますが、長福寺が所蔵する大日如来坐像は金剛界大日如来です。胸前に両手をおき左手を下にして拳を握り、その第二指を立て右手の親指でこれを握る「智拳印」という印相を結んでいます。顔つきは優美で衣服の表現は流麗でよくまとまっており、光背は透かし彫りが美しい光焰光背になっています。